

川崎病

■川崎病とは？

川崎病とは、全身の血管に炎症がおこる病気で、小児に好発します。聞きなれない方が多いかと思いますが、当科でも月に数人ほど入院することもあり、決して珍しい病気ではありません。この病気の原因については、現在まで世界中で研究がなされていますが、いまだに不明です。

■症状は？

川崎病を発症すると、以下に示すような特徴的な6つの症状が次々に出現します。

- ① 5日以上続く発熱
- ② 両眼の充血
- ③ 口唇や舌の発赤
- ④ 手足や体に大小さまざまな形の赤い発疹
- ⑤ 首のリンパ節が大きく腫れる
- ⑥ 手のひらや足の裏が赤くなり、手足の先がむくむ

これら6つの症状のうち5つ以上見られた場合、典型的な川崎病と診断します。これらの症状は必ずしも全てそろわけてではなく、他の病気との区別が難しい場合もあります。上記症状のうち3つ以上当てはまる場合には早めに小児科を受診しましょう。

■重症化すると、どうなるのでしょうか？

川崎病にかかった場合、何も治療しなくてもいずれは炎症が自然におさまると言われています。しかし、強い炎症が持続すると、心臓に栄養を送っている冠動脈（かんどうみやく）という血管に瘤（りゅう）と呼ばれるコブができてしまう場合があります。大きな瘤ができてしまうと、瘤の中で血流が滞り、血栓という血の塊が出来やすくなります。冠動脈がつまってしまう場合もあり、これはいわゆる心筋梗塞（しんきんこうそく）という状態で、命の危険にも関わってくるととても怖い合併症です。川崎病では様々な症状が見られますが、治療を行う最大の目的は、この冠動脈瘤を作らないようにすることです。

■当院における川崎病に対する治療

川崎病と診断された患者さんでは「大量免疫グロブリン療法」が主な治療になります。この治療は、免疫グロブリン製剤という薬を点滴注射で静脈内に投与し、全身の血管の炎症を抑えて冠動脈瘤の形成を防ぎます。

現在では、この大量免疫グロブリン療法が冠動脈瘤の形成を防ぐ最も有効な治療法とされていて、標準的な治療となっています。しかし、この治療を行っても十分な治療効果が得られない重症患者さんが存在します。当院での最近の取り組みとしては、重症患者さんに対しては、大量免疫グロブリン療法に加え、最初から炎症を抑え込む目的でステロイド薬を併用する治療を行っています。炎症が長引く程、冠動脈瘤ができてしまうリスクも高くなってしまうため、なるべく早期に炎症を抑え込み、冠動脈瘤の合併を防ぐという効果が期待されます。

■後遺症が残ることがあるのでしょうか？

冠動脈の合併症を起さずに治癒した場合には、他のお子さんと同じように生活ができます。冠動脈瘤が形成されてしまった患者さんの場合でも、小さな瘤であれば1～2年の経過で自然に消退する場合があります。しかし大きな冠動脈瘤の場合には、心筋梗塞を発症してしまうリスクが高いため、血栓予防目的の内服薬の継続や、定期的に精密検査が必要になります。場合によっては冠動脈に対する手術を行うこともあります。しっかりと定期通院をしていただき、適切な管理を行っていくことが重要です。